

北陸大学図書館報

Bulletin NO.42

⇒ をクリックすると本文がご覧になれます。

⇒ 第16回読書感想文コンクール講評

安田 優
(未来創造学部教授・読書感想文コンクール審査委員長)

⇒ 第16回 読書感想文コンクール 審査結果発表

⇒ 最優秀賞
「生きる」ということ

西田 愛華
(薬学部薬学科 1年次生)

⇒ 優秀賞
時間

久保 智美
(未来創造学部国際教養学科 2年次生)

⇒ 優秀賞
『「原因」と「結果」の法則』を読んで

小谷野 拓夢
(未来創造学部国際マネジメント学科 1年次生)

⇒ 優秀賞
天才

土橋 星太
(未来創造学部国際マネジメント学科 1年次生)

⇒ 審査委員から一言

⇒ 寄贈図書

⇒ 目次

北陸大学図書館報



第16回読書感想文コンクール講評

未来創造学部教授

読書感想文コンクール審査委員長 安田 優



今回の読書感想文コンクールにも、多くの皆さんが感想文を提出してくれました。この場を借りて感謝いたします。審査過程で、皆さんが書いたものをすべて読ませていただきましたが、興味深いものも多く見られました。特に審査で上位に入った感想文はいずれも構成面や内容面でもしっかりしていました。昨年度までと比べても、全体的に質的向上が見られ、上位の誰がどの賞に選ばれるかは本当に紙一重の差だったかと思います。

そのような状況の中、西田愛華さんの感想文「『生きる』ということ」が最優秀賞を獲得しました。『電池が切れるまで 子ども病院からのメッセージ』という作品から西田さんが感じた気持ちが素直につづられています。読書を通じて、病気の人たちに対する憐憫の感情が単なる思い込みにすぎなかったという「気づき」が生まれ、人生の一つの指針となるような考えを手に入れることができたように見受けられます。薬学という人間の生命に関わる学問を修めようとする人にとって、そのような気づきはかけがえのないものと言えるのではないでしょうか。西田さんの感想文が高評価を得た一つの理由は、読書後に自然にあふれ出てくる気持ちを、飾り気なく書き表すことができているからです。伝えたいと思う内容によって最適な表現方法は変わります。子どもたちが書き記した言葉に突き動かされた気持ちを伝えるには、素朴な言い回しが合っているのかもしれない。

題材となる作品選びには、皆さんの興味や関心事が反映されているかと思います。最優秀賞、優秀賞、佳作、そして努力賞を受賞した感想文では、作品を読み解くことで得られた考えを、他の人たちにもわかりやすくまとめ、伝えることができている。何か伝えたいことがあるとしても、普段何も訓練していなければ、その思いがひとりだけで口をついて出ることはないでしょう。言いたいことや考えていることを的確に、そして明確に表現するにはそれなりの訓練が必要です。今回の受賞者の皆さんは、ある程度、自らの考えを自らの言葉で表現することができていると思います。きっと話し言葉によるコミュニケーション力も高いのではないのでしょうか。

読書感想文と聞いて、何だか子どもっぽいと思う人もいるかもしれません。しかし、読書感想文には、新たな気づきが得られる以外にも、昨今の社会で高い価値が置かれているコミュニケーション力を身につけられるという利点があります。コミュニケーション力は、単に話す練習だけで獲得できるものではありません。それを高いレベルで簡単に身につけられる方法が読書と読書感想文なのです。多くの書籍を読み、それに関する自らの考えを受信者の立場も考えながら、わかりやすく、適切な文体で書き出すという訓練はコミュニケーション力向上には非常に有効です。このコンクールは、北陸大学の教育の一環として提供されています。次年度のコンクールまでに研鑽を積み、より多くの皆さんが自らのステップアップの手段としてコンクールという機会を利用してくれることを楽しみにしています。

第16回 読書感想文コンクール

審査結果発表

応募作品325編の中から、次の作品が選ばれました。

入賞作品

最優秀賞			
西田 愛華	「生きる」ということ	(薬)	1年
優秀賞			
久保 智美	時間	(未)	2年
小谷野拓夢	『「原因」と「結果」の法則』を読んで	(未)	1年
土橋 星太	天才	(未)	1年
佳作			
白鳥汰麻子	『アンネの日記』を読んで	(薬)	1年
中谷 桃菜	遺伝子をONにして生きる方法	(薬)	1年
吉野 悠生	新時代台湾へ向けて～蔡英文の挑戦～	(未)	3年
東 真帆	『梅蘭芳 世界を虜にした男』を読んで	(未)	3年
小室 絵梨	ちょっと今から仕事やめてくる	(未)	1年
努力賞			
岡田 彩	泣いた赤鬼	(薬)	1年
芹澤 美緒	吉本ばなの『キッチン』を読んで	(薬)	1年
和田茉奈美	戦争をなくすために出来ること	(薬)	1年
縄本 将吾	『ピーコの祈り』を読んで	(未)	3年
川端 尚寛	永遠の0	(未)	3年
中川 里紗	「この人という時の自分が好き」 そう思える人達と生きる	(未)	3年
松浦 由衣	「20代」とは	(未)	2年
目谷 将平	夏の庭-The Friends-あるおじいさんとの出会い	(未)	4年
寺本 萌華	後悔が示すもの	(未)	1年
松田明日瑠	自分にかけて呪い	(未)	1年
馮 佳誉	頑張らないでください	(未)	3年
ベストタイトル賞			
池 あゆみ	あなたの日々は“特別”ですか？ (書名：『フランス人は10着しか服を持たない』)	(未)	3年

* (薬) は薬学部、(未) は未来創造学部です。



表彰式 (平成29年1月16日)

「生きる」ということ

薬学部薬学科 1年次生 西田 愛華



書名 電池が切れるまで—子ども病院からのメッセージ
著者 すずらの会
出版社 角川書店

『電池が切れるまで—子ども病院からのメッセージ』は小さな身体で精一杯、病気と闘いながらも、院内学級では友達と楽しく勉強する子どもたちの言葉が書いてあります。私はこの本を読んで、改めて命の大切さを感じました。また、生きていることの幸せも感じることができました。

この本の一番初めには「命」という詩が書いてあります。この詩は宮越由貴奈さんという小学4年生の女の子が書きました。由貴奈さんは5歳の時、「神経芽細胞腫」という癌だと診断され、11歳で亡くなりました。この詩は亡くなる4か月前に書かれたそうです。私は、この詩を読んで思わず涙がこぼれました。詩の中には、「何年も何十年も月日がたってやっと神様から与えられるものだ 命がないと人間は生きられない でも命なんかいらないとって命をむだにする人もいる まだたくさん命がつかえるのに」と書かれています。そして「そんな人を見ると悲しくなる」とも書かれています。生きたくとも生きることができない人もいるのと思ったのだと感じました。現在ではテレビや新聞で毎日のように自殺の記事が流れてきます。WHOは、世界では毎年約80万人が自殺しており、自殺は各国において死因の10位以内に入り、特に15～29歳の年代では2位になっている（2012年）と報告しています。日本では、毎年約3万人の 사람들이自殺で亡くなっており、自殺率の高さは先進国の中でも群を抜いています。また自殺未遂をする人は、実際に自殺で亡くなる人の少なくとも10倍にのぼると言われています。これは、毎年約30万人、1日に約1000人の 사람들이自殺を凶っている計算になります。病気の方々は生きたいのに生きられない、健康なのに生きたくないから死を選ぶ。「命も電池のように取り換えることができたら」と考えると涙が止まりませんでした。

由貴奈さんは亡くなる間に「怖い」と弱音を言いました。そして、お父さんやお母さんに「幸せだった」とも言いました。私は詩に「私は命が疲れたと言うまでせいいっぱい生きよう」と書いたように、「精一杯生きてよ」と伝えたかったのではと感じました。

由貴奈さんのことは他の子どもたちの詩や話の中にもよく出てきます。自分も病気で苦しんでいても、他人のことを何時でも思いやる由貴奈さんのことをみんなが好いていたのだと思いました。

この本の最後の方に「ぼくは家庭内暴力をふるってた」という話がかかれています。この人は家で両親に暴力をふるっていたそうです。しかし、その人が病気になって入院することになったとき、両親がとても心配して面倒を見てくれたそうです。その人は心配する両親の姿を見て、「親のありがたみ、家族の大切さがよくわかったよ。」と言いました。どんなことがあってもその人を思う気持ちはとても綺麗で、胸を打つものだと感じました。そして「子どもを思う親ってかっこいいな」と思いました。その人は「神様がぼくに病気をくれたんだと思う。」と言いました。私は「病気を神様からの贈り物だと思うなんてすごいな」と感じました。病気になることは苦しくて、自分の思い通りに動けないことは悲しいことなのに、こう感じるのではなく感謝することはすごいことです。

病気になったからと言って悲しむだけではないのだと思います。自分がどう思い、どう考え、自身と向き合っていくのかを決めることが大切なのだと感じることができました。

この本にある詩や絵を書いたのが私よりもずっと幼い子どもたちです。この子どもたちは「死」ということを知らないまま過ごした方が良かったのではないかと感じました。しかし、「死」と向き合うことで他人への思いやりの心や命の大切さ、強さを知ること出来たのではないかと感じました。

私は、この本を読む前は病気になった方々のことを「可哀想」と感じていました。しかし、この本を読

むと病気になった方々は自分の人生を精一杯生きようとしていました。病気が治る人がいれば、治らない人もいます。自分の人生を精一杯生きた人たちは可哀想ではありませんでした。私が勝手にそう思い込んでいただけでした。

この本の題名に「電池が切れるまで」とあります。私は由貴奈さんの詩に書いてあったように命が疲れたと言うまで、精一杯生きようと思いました。そして最後には「幸せだった」と笑顔で言えるような人生を送りたいです。

私はこの本を読むことで、命や周りの人を大切に思いながら、自分のしたいことを本気で実行することが「生きる」ということなのではと感じました。

優秀賞

時間

未来創造学部国際教養学科 2年次生 久保 智美



書名 モモ
著者 ミヒヤエル・エンデ
出版社 岩波書店

私はこの本を読んだことで改めて時間の大切さについて学ぶことができました。この小説の主人公はモモという少女でどこからやってきたのかも分からない子です。

モモは聞き上手で話を聞くだけで問題を解決することが出来ます。そんなモモが時間を貯蓄する人「灰色の男達」と時間を巡って争う話です。

まずこの本を最初に読んで思ったことはモモが愛されているなあという事です。急にいなくなったモモを一年間ずっと心配していた二人の親友、そんな心配してくれる親友がいるのはとてもいいことです。ではどうしてずっと心配してくれる親友をモモがつくれたのかというモモが他人の話を聞くという特技を持っているからです。一見誰にでもできそうなことだが、私は難しいことだと思いました。なぜなら自分の興味のある事には惹かれるが、そうでない事に対して興味を持つのは無理だと思うからです。そんな事をモモは相手が話すまで待ってあげてそれから話し終わるまで聞き続けます。本当に凄いなと思いました。モモは相手が話すまで待っています。この行動は他者に自分の時間を割くことになります。この事から他の人と関わり合うなかに時間があるということが読み取れました。逆に他の人と変わらないようにする、つまり相手が話すのを待つ事が出来ないということは他者と時間をともに過ごすことができなくなることと同じです。相手の話を聞かないまたは拒否して自分勝手になることが時間の節約です。他者とかかわらないようにすればするほど時間に余裕がなくなり時間に追われる毎日を過ごすことになります。さらに私たち人間は愛することや愛されることを奪われていくのです。しかしモモはきちんと相手の話を聞きコミュニケーションを取れたからモモ自身を心配して愛してくれる親友を持つことができたのです。

その次に思ったことは時間の大切さです。私は誰にでも平等に分け与えられるものは寿命などではなく1日24時間という時間だと思っています。しかしこの時間は人間にとって短すぎて見えなくなる代表的なものだと思っています。例えば子供の頃は短い時間ですらとても長く、楽しいと感じていました。小学校のたった10分の休み時間に体育館でドッチボールや校庭に出て鬼ごっこなどをしてその10分をめいっぱい楽しんでいました。今考えると本当に1分1分が長く感じその時間を楽しんで毎日を過ごしていました。しかし成長していくうちにやらなければならないことが多くなり時間が過ぎるのがとても早く感じるようになりました。私も最近は一週間がとても早く感じます。この本を読んで時間が短く感じるのは本人の感じ方の違いではなくどのくらい心を広く持てるかの違いなのではないかと気づきました。私は時間をはかるにはカレンダーや時計があるが、はかってみたとこであまり意味が無いと思います。なぜなら自分自身がどのような時間を過ごしたかによって、わずか一時間でも永遠の長さを感じられることもあれば、ほんの一

瞬と思えることもあるからです。だから時間を計るのではなく自分なりの充実した時間の過ごし方をするべきだと思いました。時間とは、生きるということ、だと私は思います。自分が生きている限り時間はずっと進み続けます。しかし私たちは自分がいつまで生きられるのか全く分かりませんし、どんなに楽しいことや嫌なことがあっても明日は来ます。だから今生きている1分1秒を大切にしていこうと思いました。

私はこの本を小学生の弟に勧められ読んだのですが、時間に追われている大人こそ読むべき本だと思いました。時間についてじっくり考えるきっかけになり自分がいま優先すべきことが見えてきました。私は今中国で留学をしているのですが、今しか得られない時間を大切に、将来留学して良かったと思えるような毎日を過ごしていきたいと思います。

優秀賞

『「原因」と「結果」の法則』を読んで

未来創造学部国際マネジメント学科 1年次生 小谷野 拓夢

書名 原因と結果の法則
著者 ジェームズ・アレン
出版社 サンマーク出版



「他人を変えたいなら、自分が変わらないといけない」。これは、先日行われた部活動のミーティングで話された言葉だ。この言葉を聞き、具体的に自分を変えたいと思っていた私はふと立ち寄った図書館でこの本に出会った。

私はこの本の中の、「人間は、自分の人格の制作者であり、自分の環境と運命の設計者だ」という言葉に感銘を受けた。人間は自分の理想とする「結果」が出せなかったときに、しばしば環境や周囲の人間を「原因」とし、言い訳をする。このような経験は誰にでもあるのではないだろうか。人間には人格、つまり心があり、喜びや悲しみなど様々な感情が生まれる。そして心は正と負に分けることができる。言い訳をするときには、負の心が強いことでその感情が生まれる。この心というのは「環境が人を育てる」という言葉があるように、自分が育った環境に左右されると思っていた。しかしそれは逆で、人間の心によって環境や運命は良くなり、また悪くなる。つまり、あらゆる「結果」は、自分の心が「原因」として成り立つということを著者のジェームズ・アレン氏は述べている。これを知り、今までの私の考え方が一変した。思うように結果が出せなかった時、まず自分に原因がないか考えるようにした。また人から物事を頼まれれば、進んで取り組んだ。今まで好きになれなかった人とも積極的にコミュニケーションを図った。自分が苦手だと思っているようなことに目を向けた。その際に生まれる感情はどのようなものか自分で理解し修正していく。そうすると自分を客観視できていることが分かった。そして、それこそが自己犠牲なのだ。一般的に自己犠牲とは、他者のために自分の時間や労力を犠牲にすることを意味する。しかしこの本では自分の人格、心の中に存在する負の感情を犠牲にし、成功を目指すことを自己犠牲としている。私が今までしてきた自己犠牲は、他者のためだけであって自分のためではなかった。例えば、苦手なことをしようとするときに生まれる感情は大抵「面倒くさい」「嫌い」という感情である。人間は弱い生き物で、楽な道を進みたがる。そういった感情を抑制することが自分のための自己犠牲であり、成功を生み出す方法なのだ。しかし、自分自身だけで感情を抑制するのは限界がある。そういったときは、周囲の人間に頼るべきだ。自分の弱い感情を指摘してもらい、改善していく。そして、指摘してもらえばかりではなく、自分も指摘する。お互いに改善していくことが大切なことなのだ。そう考えると私は、環境に恵まれている。部活動の仲間やゼミの友人、寮生活など周りにはたくさん人間がいる。そういった人たちの一人ひとりの意見を聞き入れ、心の成長につなげることができる。今までなんとなく生活してきた環境が私にとって成長できる環境なのだ気づいた。当たり前のように生活していたこの環境は当たり前ではない

と思った。だからこそ、今まで気付かなかった些細な出来事に気付く心や負の感情を抱いていたようなことをもう一度見つめなおす心を持ちたい。それこそが、より良い環境をつくる一歩になると私は思う。

こうしてみるといかに自分が弱い人間かというのがよく分かる。今までは両親や教師、監督が敷いたレールの上をただ歩いているだけでよかったのかもしれない。しかし大学生になった今、自分のことを自分で管理し生活する義務がある。誰しもがこの四年間の中で達成したい目標や夢があると思う。さらには、就職といった大きな壁がまっている。それらでよい「結果」を出すには、今までの自分を変えなければいけない。そのために心を変える。弱い自分を変える。他者のため、そして自分のために自己犠牲をする。そうすれば環境は変わり、運命が変わる。すべての「結果」の「原因」は心なのだから。

優秀賞

天才

未来創造学部国際マネジメント学科 1年次生 土橋 星太



書名 天才
著者 石原 慎太郎
出版社 幻冬舎

私が読んだ本は、石原慎太郎が田中角栄に成り代わり、一人称で描いた『天才』という本だ。この本は田中角栄が生まれてから死ぬまでの一生を描いている。その中で、角栄のカリスマ性、ユーモア、大胆さ、癖などが事細かく描かれている。私は田中角栄という人物について、名前を聞いたことがあるという程度だった。だがこの本をきっかけに田中角栄について非常に興味を持ち、また政治全体や日米関係などにも興味を持つことができた。

田中角栄の学歴は小学校卒だ。だが、彼は類まれなものの見方、考え方で、まずは土木作業の現場監督、そして建設会社を立ち上げ全国50位入りするまでになった。また、軍隊も経験し、政界に進出。郵政大臣、大蔵大臣、通商産業大臣を経て、内閣総理大臣に就任。ロッキード事件により総理の座を失うが、その後は陰で日本の政治を動かした。

私がまず、すごいと思ったのは、角栄は賃金も安い、普通の土木作業を経験していることだ。そしてそれによって様々なことを感じ取っているところだ。角栄は「この世で一番末端の仕事をしている人間の力こそが、この世の中を結果として大きく変えていくのだという実感があつた。」と語っている。私もそう思った。多くの人にとって理想の仕事ではない仕事をしている人の頑張りこそが世の中を動かしている必要不可欠なことであると思った。

私がなぜこの本を読んだことで政治や日米関係にまで興味を持ったかというのは、ロッキード事件について書かれていたことが理由だった。ロッキード事件は歴史の授業で、少し習った程度で何がなんだかわからなかった。この本を読んで、ロッキード事件とは当時首相である田中角栄がロッキード社の航空機の購入の際に多額の受諾収賄が行われた大事件であると知った。

だが、真相はどうやら違ったようだ。角栄は、時にアメリカの嫌がるような政治を行ってきた。主には、アメリカに先駆けての日中友好化を図ったことやアメリカに頼らないために独自の石油ルートを探したことなどだ。それにより、アメリカの逆鱗に触れ、アメリカの陰謀通りに角栄は罪を着せられたのである。著書でも記されているように「無念ながらこの国は未だにアメリカの属国ということを何とこの俺自身が証してしまったのかもしれない。」とある。結局はアメリカのいいなりにならず、日本のことを一番に考えて行った政治でアメリカの虎の尾を踏みつけた角栄を消すために仕組まれた罠だったということだろう。

私はこれを読んだとき強く衝撃を受けた。なぜなら、これは今もまだ続いていると思ったからだ。現在の安倍政権では、様々なおかしいことが起こっているように思える。環太平洋パートナーシップ協定

(TPP) や特定秘密保護法、原発再稼働、大勢の反対デモを押し切って、安保法案を可決させたことなど。アメリカのやりたいように物事が進んでいるのではないかと感じる。集団的自衛権の行使により、第2次世界大戦後、日本がずっと守り続けてきた平和が壊される可能性もある。そして、さらに大きな問題となるのは憲法改正についてだ。このまま憲法が改正されてしまったら、独裁政治になりかねないという懸念もある。我々、学生は未来の日本を担っていく身として、今起きていることを知らなければならない。だが多くのマスメディアが真実を報道し我々に伝えているとは限らない。だから、自分で考えて情報を得ないといけない。アメリカと日本の関係。そしてどうしたらいいのか。一人ひとりにできることはなにか。自分も含めて、一人ができることはほんのちっぽけなことかもしれない。だが皆が認識し、学び、考えれば大きな力になるかもしれない。

最後に、『天才』という著書で田中角栄という人物を通して、私に、政治、経済、日米関係、現在の日本の状況に関して学ぶきっかけができたことに感謝したい。そしてこの先、田中角栄のような愛国心や正義感のある総理大臣が生まれること。日本が本当の意味で独立し、平和でい続けられることを切に願う。

審査委員から一言



審査委員
村山 次哉
(薬学部教授)

全ての感想文を読ませていただいたが、特に上位に残った作品はいずれも力作ぞろいで、甲乙つけ難く審査員泣かせであった。それでも順位をつけなくてはならないため、自分なりの審査基準を決めた上で審査を行う事とした。読書後の感想文であるから、読み終えた後自分がどのような事を感じたかについて、共感力や達成感、あるいは視野の広がり等について、自分の言葉で本当の自分をいかに表現されているかにポイントを置いて審査を行った。

私は、ここ数年は専門書や学術論文に目を奪われる事が多く、なかなか一般書を読書する機会が少なかったのが、今回の感想文を読ませていただき大いに刺激を受けた。中には是非読んでみたいものがあつたので、じっくり手に取ってみたいと思った。学生諸君、我々と一緒にもっともっと本に触れましょう！



審査委員
山崎 眞津美
(薬学部准教授)

第16回読書感想文コンクールへの多数の応募、ありがとうございました。また、入賞されたみなさん、本当におめでとうございませう。といっても、いずれの感想文からもそれぞれの思いが伝わり、点数をつけるのに非常に悩ませてもらいました。「この本読んでみたいなー」と審査を忘れる場面もありましたが、最終的にみなさんの「これから自分はこうありたい」という思いに対して、点数に期待と応援の意味を込めました。

本は新しい知識をくれるのはもちろん、これまでの自分の経験と重ね合わせて共感したり反省したりする中で、これからの自分を応援するものでもあると思います。どうぞこれからも多くの本に出会ってください。そして、その本のおもしろさでもよし、自分の思いでもよし、どんどん伝えてください。知識も伝える力を身につけることも、ひとりひとりの武器となり魅力になると思います。



審査委員
鈴木 宏一
(薬学部講師)

今年もたくさんの応募がありました。同じ書名の感想文もありました。皆さんはどのようにして本を選んだのでしょうか。「今、話題の・・・」、「題名に惹かれて」、「TVドラマや映画から」、「以前から気になっていた」、「人に勧められて」等いろいろな理由から選んだのではないかと思います。私は、「題名に惹かれて」が多いです。どんな理由であれ、登場人物の生き方や考え方に対し、自分と比べて共感したり、違うと思ったり、疑問に思ったり、いろいろな思いを巡らせながらいつの間にか展開によって、著者の世界に入り込んでしまいます。不思議で面白いですね。同じ本でも各個人の受け止め方が違うので感想文の内容が違うのも当然です。一つの本を何人かで読んで、その本に対し議論するのも面白いかもしれませんね。このコンクールを機会に、本に触れ本を楽しむ学生が増えていくといいなと思っています。



審査委員
南谷 直利
(未来創造学部教授)

薬学部70編、未来創造学部254編及び留学生別科1編の計325編からなる読書感想文の作品があり、図書館委員の一人として応募者及び関係者に、心からお礼を申し上げたい。

6名の審査委員がそれぞれ5段階で評価し、審査委員の合計で西田愛華さんが最高得点を獲得された。合計得点の上位が入賞者となり、公正な得点法による審査結果の一方で、得点審査方法にあらわせない側面の存在を、個人的な意見として短言する。『アンネの日記』を読んで、「戦争」をなくすために出来ること、『永遠の0』を読んで、などの作品タイトルが心に留まった。学生にとっては、全く直面しない「戦争」を背景にした作品が入賞者の中に複数編あり、その作品を読むことにより、国民が最も苦しんだ時代の絵図が蘇った。国の重要な事案を決定する場から、PhilosophieとIntelligenzがなくなったことで開戦し、国民の生命と財産に、最悪な影響を与えていった事実があった。その時代に、国民を第一に考えている人物の意向を貫けば、PhilosophieとIntelligenzを掲げれば、「戦争」も、「敗戦」にも、成っていないと感じる。

国が衰退していく末路を警鐘する上で、「戦争」を背景にした作品は意義深く、本学学生による文章表現の中の隠されたメッセージに対し、感心しつつ直(すなお)に筆を擱く。



審査委員
高橋 純子
(新学部設置準備室) 准教授

審査を通して実用書や自己啓発、偉人の生き方などを好んで読まれる方が多いということに気づきました。実は、私自身も同様の書籍をよく手にします。自分とは違う世界で活躍されている方の活躍や生き様などは新鮮で刺激的です。また、意見が合わない人との付き合い方や落ち込んだときのマインドをどのように向上させるかなど、端的に明記されているので妙に解決した感じにさせてくれます。学生の皆さんも悩みや人生観など書籍を通して解決の糸口を探っているのかなとも感じました。

素晴らしい本との出会いを同じ悩みを抱えている他者へ薦めてあげることが皆さんの次のステップかと思います。得られた「知」は他者のこころを豊かにすることでしょう。

寄 贈 図 書

本学の教職員から、下記のとおり図書の寄贈がありました。紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

書 名	寄 贈 者
『宮本武蔵』 他 計 50 冊	泉 洋成 (理事)
『薬の影響を考える 臨床検査値ハンドブック第3版』 他 計 6 冊	三浦 雅一 (薬学部長)
『絵でまるわかり分子標的抗がん薬』 1 冊	石川 和宏 (薬学部教授)
『Disney's Wonderful World of Reading』 他 計 18 冊	J. デニス (未来創造学部教授)



北陸大学図書館報 NO.42 平成29年3月31日発行

編集・発行：北陸大学図書館 〒920-1180 金沢市太陽が丘1-1 TEL. 076-229-3021 FAX 076-229-4850
Eメール：tlib@hokuriku-u.ac.jp 北陸大学図書館ホームページ：http://www.hokuriku-u.ac.jp/about/campus/library.html

※北陸大学図書館報は、ホームページでもご覧いただけます。